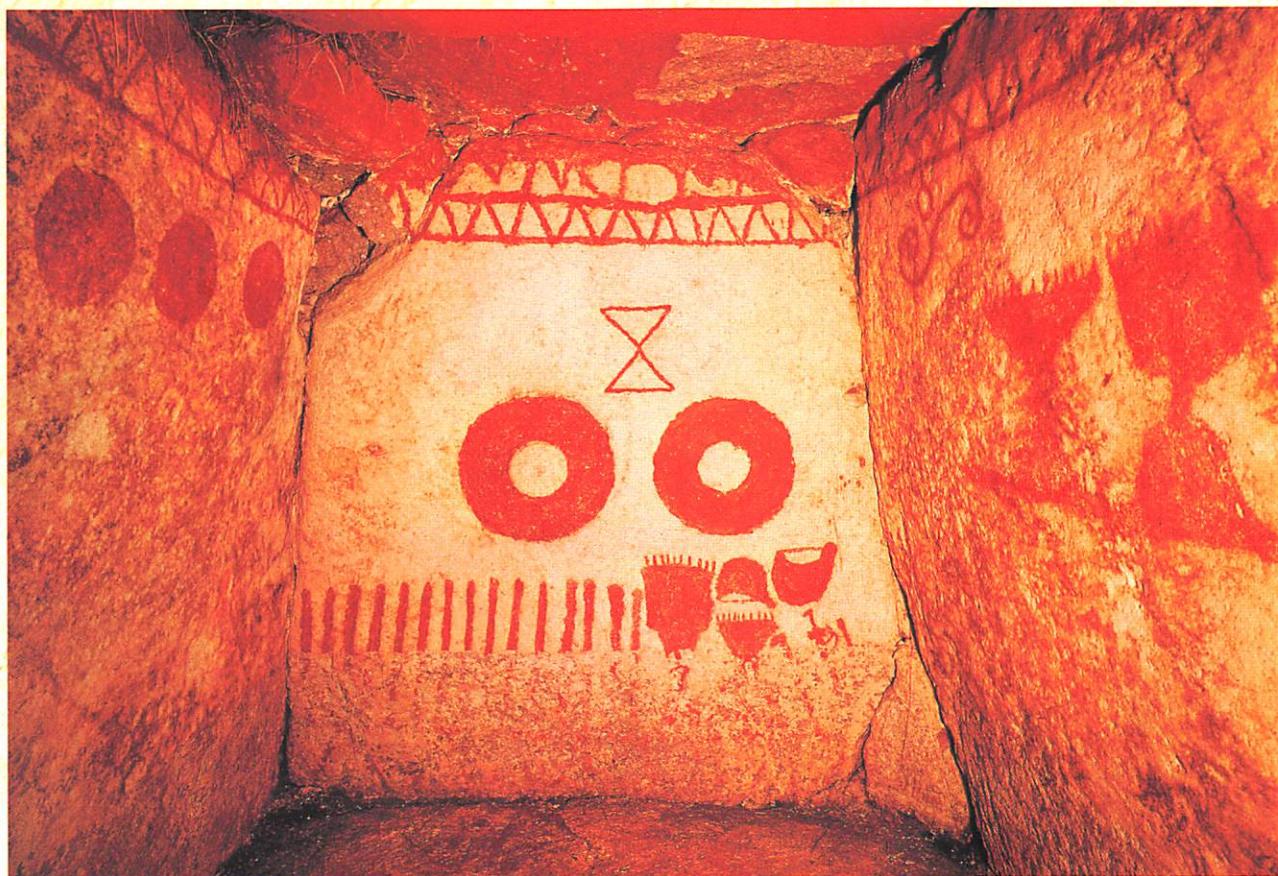


平成 21 年度後期企画展

茨城県の 装飾古墳

たけかしまのみこと のこ
～建借間命が遺したもの～



虎塚古墳 玄室奥壁



熊本県立装飾古墳館

館 長 挨 拶

全国に600基を超える装飾古墳。熊本は200基近い数が確認されており、全国一の数を誇っています。近県の福岡と合わせると、約半数が九州北部に分布しています。装飾古墳は壁画という古墳時代の豊かな精神を感じる第一級の歴史遺産です。

昭和49年、華麗な壁画が茨城県ひたちなか市で発見されました。昭和47年の高松塚古墳発見に次ぐ、装飾古墳研究史上画期的な調査成果でした。その装飾古墳の名は「虎塚古墳（とらづかこふん）」。研究者達は、二つの同心円文、白土の上に規則正しく描かれた連続三角文など鮮やかな装飾に注目しました。

虎塚古墳は全長56.5mの前方後円墳です。虎塚古墳群の第1号墳であり、首長墓として知られていました。この石室に描かれた装飾壁画の発見は、海を介した繋がりを想起させ、菊池川流域と茨城の地を結ぶ歴史的事象の有無について意見が交わされることになります。

「古事記」や「常陸国風土記」のなかでは、那賀郡の初代の国造として「建借間命（たけかしまのみこと）」が登場します。命は多氏（おおし）と呼ばれる一族の出自とされ、火君・阿蘇君・筑紫三家連等九州で装飾古墳が造られた地域の国造と同族と記されており、九州との関連を伺われます。

また、虎塚古墳は東国屈指の装飾古墳として文化財の保存と公開の両立をきめ細やかな調査・研究によって遺してきたことでも注目されています。

虎塚古墳の調査を行った明治大学、勝田市教育委員会（当時）の努力により、春と秋の二回の公開を行いつつ、壁画を劣化させることなく今日まで護り遣しています。

このように装飾古墳の保存と公開の両立を30数年維持し続けてきた実績は、全国唯一と言っても過言ではありません。

装飾古墳館では、平成19年度から県内装飾古墳の環境調査を始めています。貴重な装飾を護るためにモニタリングと、県民に広く周知するための一斉公開を目指す取り組みは、この虎塚古墳の保護施策を手本としています。

茨城県下の装飾古墳とされる古墳は、18基を数えます。虎塚古墳の文様のみならず、黒と赤の連続三角文を施す十王前横穴11号墳（日立市）、顔料の滴りが確認できる太子古墳（かすみがうら市）、鞍（ゆき）を線刻した吉田古墳（水戸市）等、何れも熊本との関連を考えさせられる装飾ばかりです。

最後になりましたが、企画展開催にあたってご協力いただきましたひたちなか市教育委員会、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社をはじめ、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会、筑西市教育委員会、東海村教育委員会、かすみがうら市教育委員会、日立郷土博物館、水戸市教育委員会、鴨志田篤二氏、生田目和利氏、池田勝則氏、瓦吹堅氏、多くの関係機関・協力者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成21年11月7日 熊本県立装飾古墳館 館長 大田 幸博

目 次

館長挨拶	P 1
目次・例言	P 2
1. 茨城県下の装飾古墳の特徴	P 4
2. 装飾古墳、形象埴輪に用いられる顔料	P 6
3. 茨城県下の装飾古墳	P 7
4. 熊本県と茨城県、二つの地域の共通性・非共通性	P 20
5. 文献から見た装飾古墳に関わる土地の記述	P 24
出品・資料提供一覧・引用文献	P 26

例 言

1 この図録は、平成21年11月7日から12月27日まで開催する後期企画展「茨城県の装飾古墳」の展示図録として作製しました。

2 図録の編集は池田朋生が担当し、野方月美、菊川知美がこれを補佐しました。

3 今回の企画展に伴い記念講演会を開催します。演題を「虎塚古墳発掘の頃」「茨城県下の装飾古墳」「茨城県と熊本県の装飾古墳」とし、それぞれ、鴨志田篤二氏、稲田健一氏に依頼しました。また「茨城県と熊本県の装飾古墳」は池田がこれを担当します。

4 企画展にご協力頂いた機関・個人の方々については以下にお名前を記したとおりです。皆様の御協力に感謝申し上げます。

ひたちなか市教育委員会、茨城県教育委員会、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化振興課文化財調査事務所、東海村教育委員会、水戸市教育委員会、那珂市立那珂歴史民俗資料館、日立市郷土博物館、常陸太田市教育委員会、かすみがうら市教育委員会、筑西市教育委員会、桜川市教育委員会、鴨志田篤二、稲田健一、朽津信明、川口武彦、片平雅俊、西野保、千葉隆司、大谷昌良、生田日和利、越田真太郎、川上つね子、池田勝則、前田軍治（以上順不同・敬称略）

茨城県の装飾古墳



ひたちなか市埋蔵文化財調査センター



虎塚4号墳



十五郎横穴墓（虎塚2号墳眼下に所在）



馬渡埴輪製作遺跡

1. 茨城県下の装飾古墳の特徴

茨城県内の装飾古墳は、これまで18基が確認・報告されています。この地域は、東日本のなかでも虎塚古墳をはじめとする、彩色豊かな装飾が特に遺された地域として注目されます。

茨城県で装飾古墳が造られはじめた時期は、概ね6世紀末頃～7世紀初めと言われており、埴輪の製作、造立が見られないこと、7世紀の終末期古墳にまで採用されることなどが、この地域の特徴と言えます。

東日本における装飾古墳は、宮城県、福島県等東北地方まで分布していますが、それらは全て横穴墓内での装飾であり、古墳（前方後円墳、円墳、方墳等）の石室内への装飾が採用される地域としては最も東側に位置します。

九州では、浮彫、線刻による幾何学文、線刻と彩色の併用、一定の場所や部分への顔料の塗布、顔料による絵画的表現、細い線刻による自由画風の装飾等、様々な装飾技法が見られます。彩色に用いられる顔料では、赤・白・黒・青（灰色）・黄・緑等が挙げられます。

一方、茨城県内では、線刻と彩色の併用による顔料の塗布（虎塚古墳、十王前横穴群11号墓、）顔料による絵画的表現（船玉古墳、花園3号墳）、線刻による装飾（吉田古墳、幡バッケ横穴群6号墓）等が装飾技法として用いられています。顔料の使用は、黒・白・赤の三種類が確認されています。なかでも虎塚古墳は、九州では珍しい顔料（白土）を下地として塗った装飾古墳です。

九州、熊本の装飾古墳の正確な数は研究者の間で異なることがあります。理由は様々ですが、特に自由画風の線刻による装飾では、開口が古い場合、後世の追刻もあると考えられ、慎重な検討が必要です。

茨城県内でも、この課題から検討が加えられており、確実な装飾古墳の数は11基とも指摘されています。

装飾古墳が造られる時期にも各地域に違いがあります。熊本では概ね5世紀～6世紀、福岡では6世紀に多く造られていますが、茨城県ではやや遅れて6世紀末～7世紀に見られます。熊本でこの時期の装飾古墳は、弁慶ガ穴古墳（熊本県山鹿市）、永安寺東古墳（熊本県玉名市）、桂原1号墳（熊本県宇城市）等が挙げられます。装飾される内容も、顔料で船や鞆を描く、線刻と彩色を組合せ、円文・連続三角文を描く、自由画風に線刻で表す等、同時期の茨城県下の装飾古墳と装飾の技法でも酷似しています。

茨城県をはじめ、関東、東北では、太平洋側に装飾古墳が点在しています。この現象には、在地の埴輪祭祀等から独自発展するという説と、九州からの伝播と捉えるという、大きく二つの説が挙がっています。

そこで本展示では、装飾古墳が出現する前段階で、装飾古墳と同種の彩色を施した埴輪（舟塚1号墳出土武人埴輪）にも着目し、装飾古墳との共通性・非共通性も併せて紹介いたします。

番号	古墳名	所在地	立地	時期	出土遺物	墳丘	埋葬施設	図文の場所	施文方法	図文の種類	備考
1	虎塚古墳	ひたちなか市中根字指淡	台地端部 標高21m	7世紀初頭	小大刀・刀子・刀類 佩用金具・鉄鎌・鉄環・鉄鋸・槍鉋・須恵器・土師器	前方後円墳(56.5m)	横穴式石室	玄室	彩色(赤)一部線刻彩色	連続三角文・同心円文・刀・鞆・鉢・矛ほか	国指定史跡
2	吉田古墳	水戸市元吉田町	台地上 標高約30m	7世紀前半	金環・鉄鎌・直刀片	多角墳	横穴式石室	玄室	線刻	大刀・刀子・鉢・盾・鞆など	国指定史跡
3	船玉古墳	筑西市船玉	台地端部 標高39m	6世紀末～7世紀初頭	不明	方墳(35m)	横穴式石室	後室・前室	彩色(赤・白)	鞆・鞆・鐵・家・船・円文	県指定史跡
4	花園3号墳	桜川市友部	台地端部 標高71m	6世紀末～7世紀初頭	直刀・須恵器	方墳(30m)	横穴式石室	玄室	彩色(赤・黒・白)	鞆・槍・大刀・船・X字文・円文・珠文ほか	



折越十日塚古墳

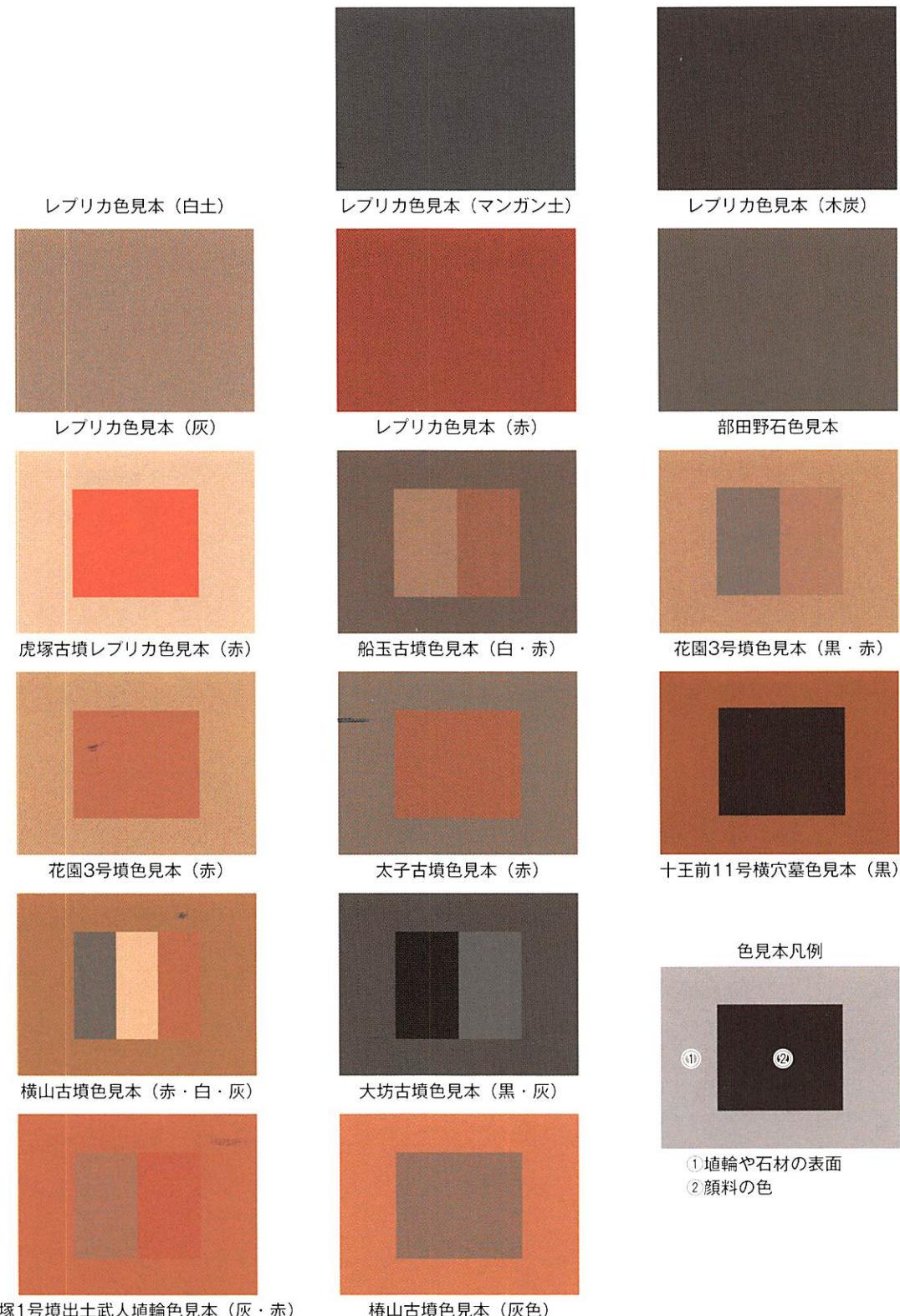


茨城県内の装飾古墳の分布図

番号	古墳名	所在地	立地	時期	出土遺物	墳丘	埋葬施設	図文の場所	施文方法	図文の種類	備考
5	太子1号墳	かすみがうら市安食	台地上 標高約25m	6世紀末～7世紀初頭	直刀・刀子・銀環・須恵器等	前方後円墳?	横穴式石室	玄室	彩色(赤)	円文・珠文	県指定史跡
6	十王前2号横穴	日立市川尻町十王前	丘陵斜面 標高18m	6世紀末～7世紀初頭	不明		横穴	玄室	線刻彩色(赤・黒)	連続三角文・格子状文	市指定史跡
7	十王前1・4号横穴	日立市川尻町十王前	丘陵斜面 標高20m	6世紀末～7世紀初頭	不明	—	横穴	玄室	線刻彩色(赤)	連続三角文	市指定史跡
8	十王前1・1号横穴	日立市川尻町十王前	丘陵斜面 標高21m	6世紀末～7世紀初頭	不明	—	横穴	玄室	線刻彩色(赤・黒・白)	連続三角文・盾	市指定史跡
9	幡6号横穴	常陸太田市幡町	丘陵斜面 標高約30m	6世紀末～7世紀初頭	不明	—	横穴	玄室	線刻	鳥・船・家・塔・龍?など	市指定史跡
10	幡11号横穴	常陸太田市幡町	丘陵斜面 標高約30m	7世紀前半	不明	—	横穴	玄室	線刻	人物・鳥・家	市指定史跡
11	白河内古墳	那珂市那珂町門部	台地上 標高約35m	7世紀前半	不明	円墳(16m)	横穴式石室	玄室	線刻	鳥・樹木	
12	須和間1・2号墳	那珂郡東海村須和間	台地端部 標高23m	7世紀前半	刀子・鉄鎌・刀類・用金具・切子玉・丸玉・小玉・須恵器	円墳(20m)	横穴式石室	玄室	線刻	水鳥	
13	権現山下1号横穴	水戸市下国井町	丘陵斜面 標高約30m	7世紀	須恵器・土師器	—	横穴	玄室	線刻	放射状線文・綾文	
14	権現山下2号横穴	水戸市下国井町	丘陵斜面 標高約30m	7世紀	無	—	横穴	玄室	線刻	稻妻形文・綾綿・横線・建物・骨?	
15	金上古墳	茨城県ひたちなか市大成町	台地端部 標高約25m	7世紀前半	鉄製骨・直刀・鉄鎌・馬具・勾玉・糞玉	円墳(30m)	横穴式石室	玄室	線刻	双・格子目状文	
16	猫淵9号横穴	常陸太田市高柿町	丘陵斜面 標高約35m	7世紀	須恵器・小玉	—	横穴	玄室	線刻	人物・魚	
17	折越十日塚古墳	かすみがうら市坂	台地端部 標高約25m	6世紀末～7世紀初頭	不明	前方後円墳(60m)	横穴式石室	玄室	線刻彩色(赤)	縦線・横線・斜線	町指定史跡
18	下ノ諏訪横穴	那珂郡東海	丘陵斜面 標高約15m	7世紀	不明	—	横穴	玄室	線刻	人物・竜(蛇)	

2. 装飾古墳、形象埴輪に用いられる顔料

茨城県下の装飾古墳の発生は、九州との繋がりがあるとする説と、埴輪祭祀の石室内装飾への採用等独自的な発生とする説があります。本企画展では、両地域で使用される顔料に注目し、両地域の特徴を紹介します。



3. 茨城県下の装飾古墳

1) 虎塚古墳群第1号墳：虎塚（とらづか）古墳

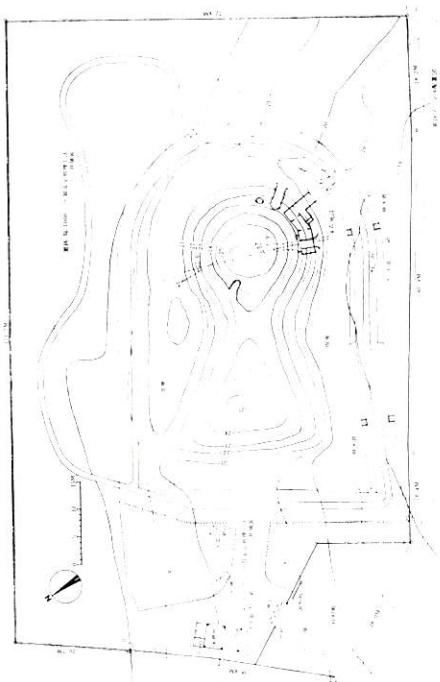
那珂川の支流に挟まれた東中根台地の端部、標高21mに位置します。古墳群唯一の前方後円墳(56.5m)です。他の古墳は、2号墳～6号墳まで確認されていますが、円墳、方墳、多角墳等何れも埴輪が出土していません。このうち虎塚4号墳は、非装飾ながら部田野(へたの)石を用いた石室で、剝り抜き玄門を持っています。

那珂川を挟む虎塚古墳群の対岸には、虎塚古墳群以前の時期にあたる多数の古墳群が造られています。現在、台地の眼下には水田が広がりますが、古墳群築造当時、那珂川が入り江となり、多くの船が往来していたことでしょう。石室は、台地端部で採取される部田野石を用いた単室構造の横穴式石室です。同じく首長墓と見られる装飾古墳(船玉古墳群1号墳・十日塚古墳)と、玄室の左右側壁の石材数が2対1という共通性があります。

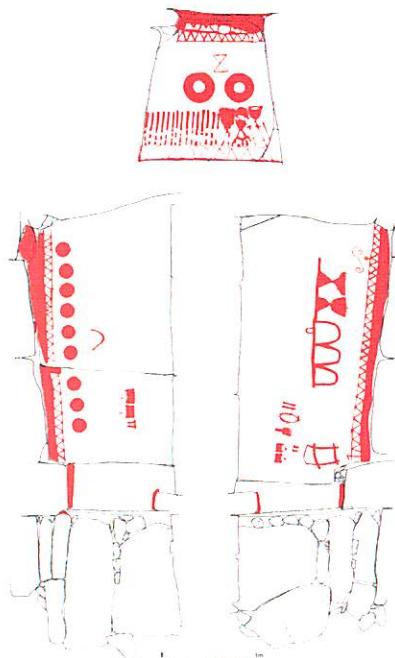
時期は、小大刀・刀子・鉄鎌・鉄環・鉄鋸・槍鉢・須恵器・土師器等の出土品から7世紀初頭と見られます。

装飾技法は、玄室奥壁・左右側壁、玄門等、全面にハケのような工具を用いて白土を下塗りし、その上にベンガラで三角文等の幾何学文、鞍等の具象文を描きます。一部線刻と彩色を併用(同心円文・円文)します。奥壁の無彩色の線刻した円文は塗り残しのようです。玄門側と奥壁側で装飾のタッチが異なる等、保存状態の良い壁画故に、装飾技法の細部が観察できます。

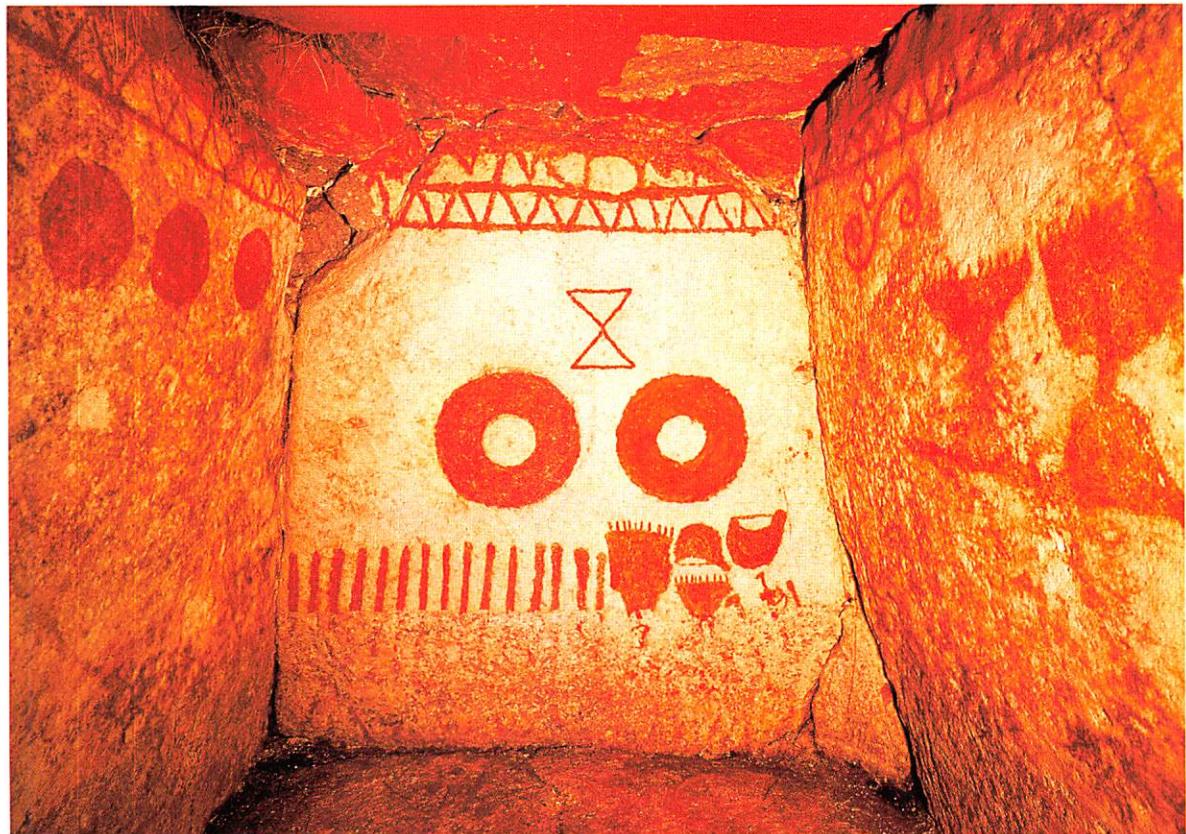
虎塚古墳には、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターが隣接します。センター内には同古墳の出土品をはじめ、原寸大の現状を再現したレプリカが置かれ、関連した体験学習も併せて実施されています。石室内は、環境調査が常時行われており、得られたデータを元に年二回の不定期の公開が行われています。保存を重視した公開方法についても注目されます。



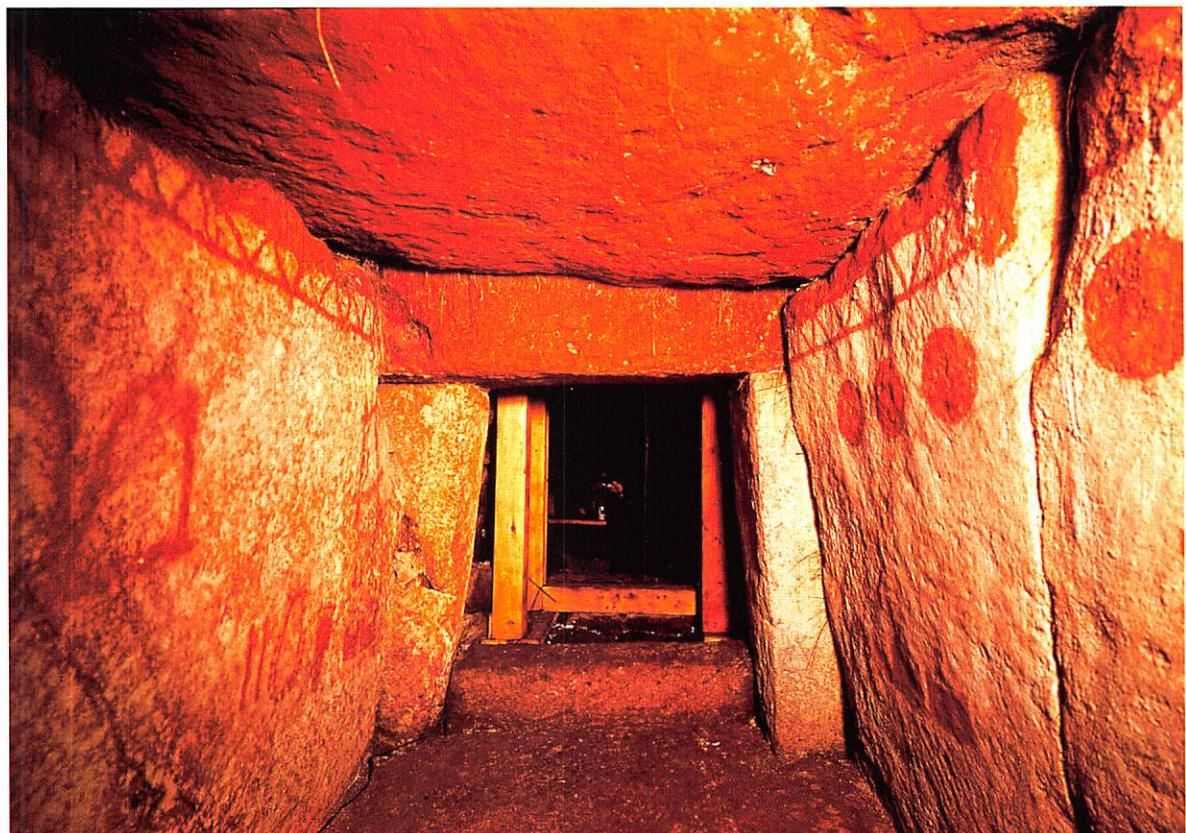
虎塚古墳
(引用文献3)一部改変



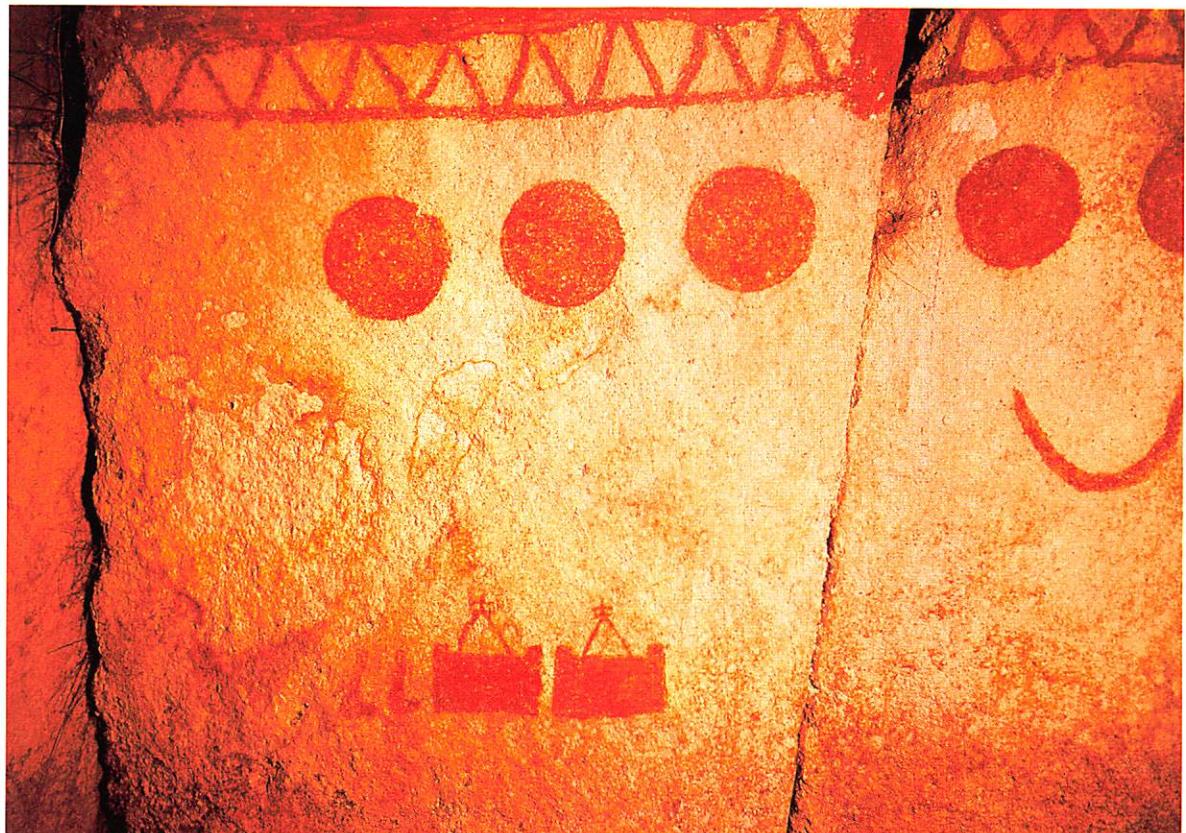
虎塚古墳石室実測図
(引用文献3)一部改変



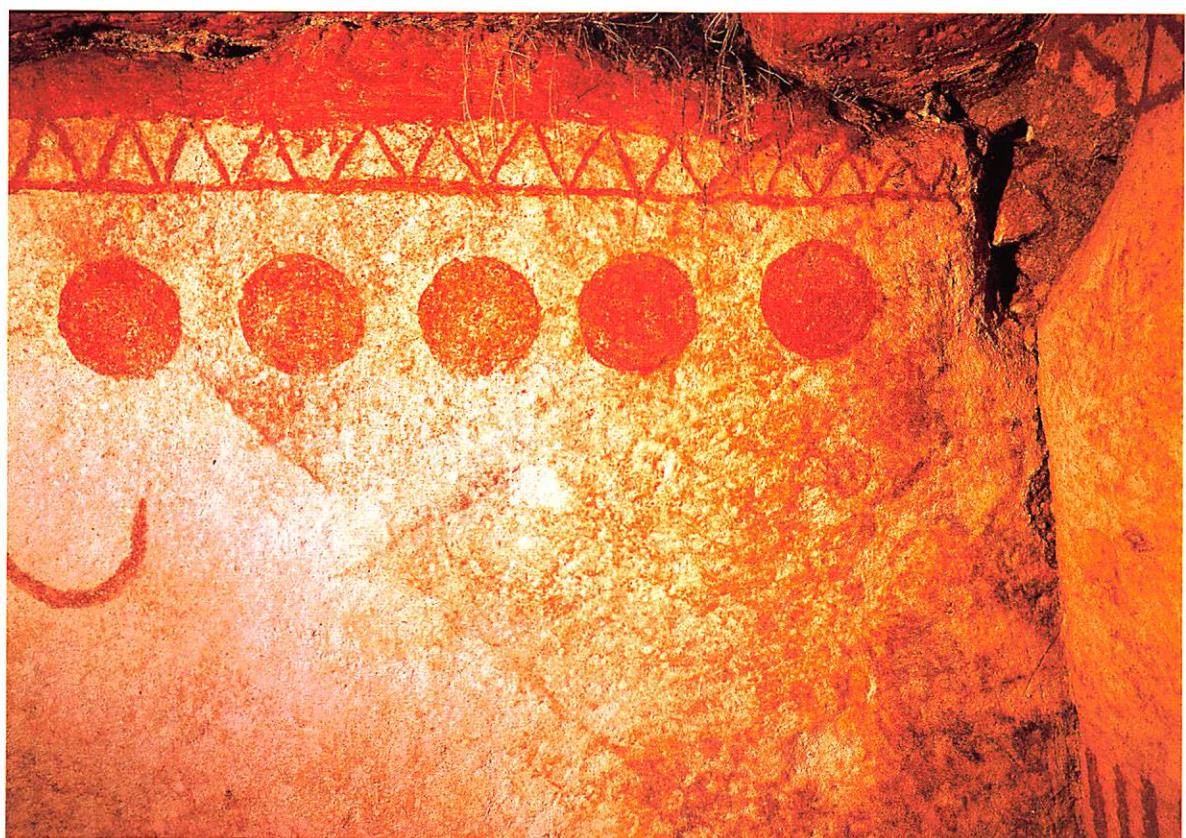
虎塚古墳 玄室奥壁



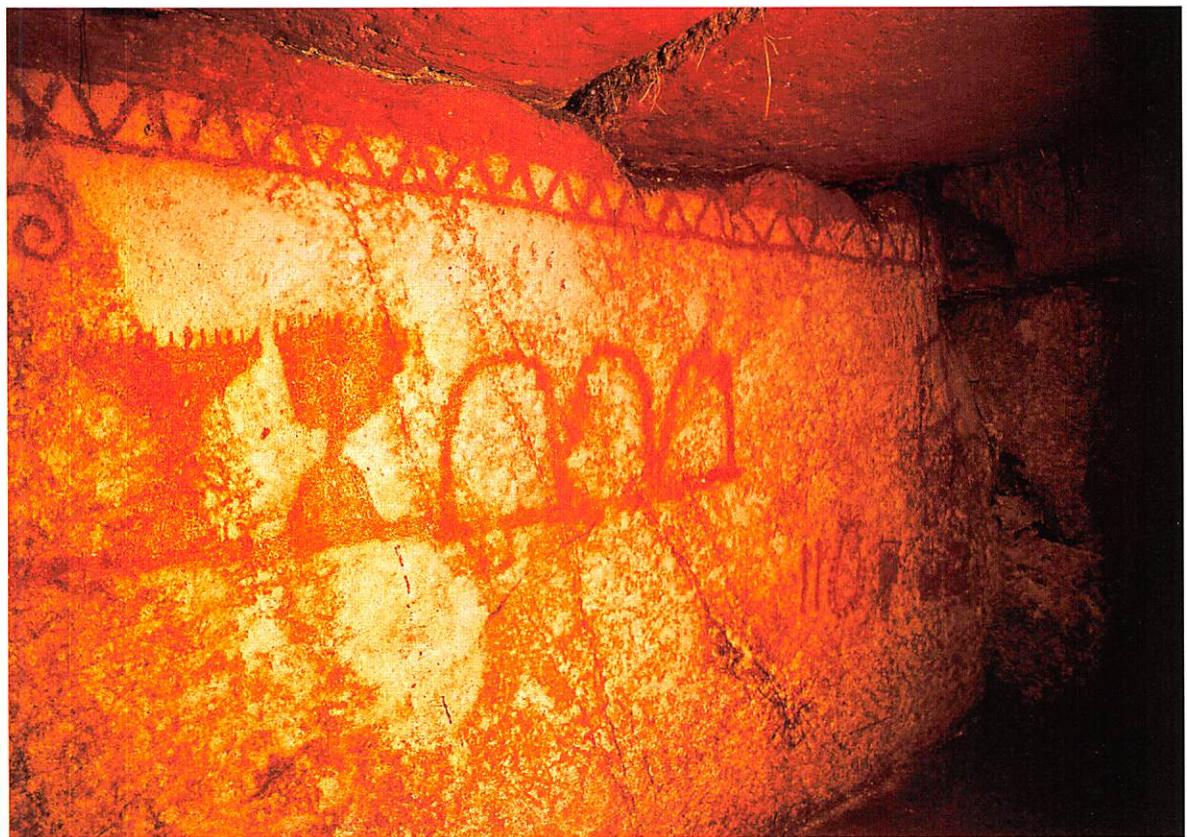
虎塚古墳 玄室玄門



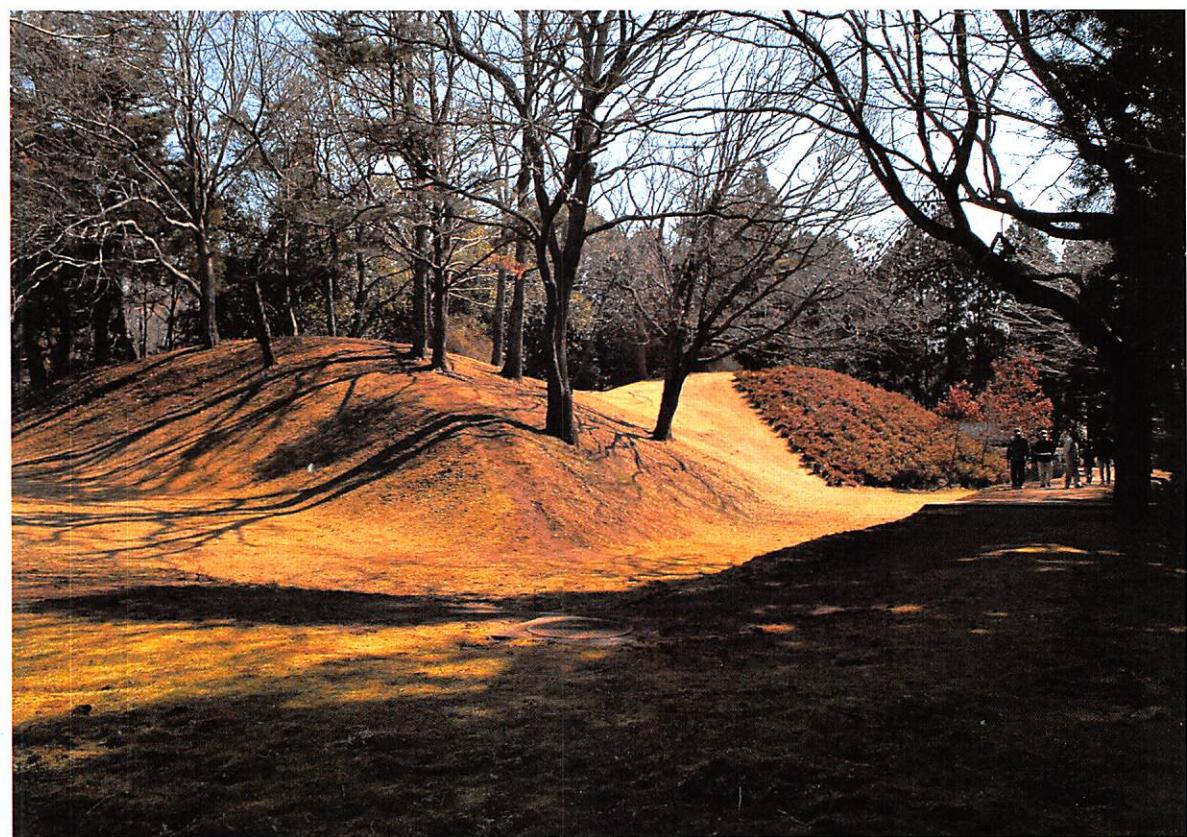
虎塚古墳 左壁



虎塚古墳 左壁



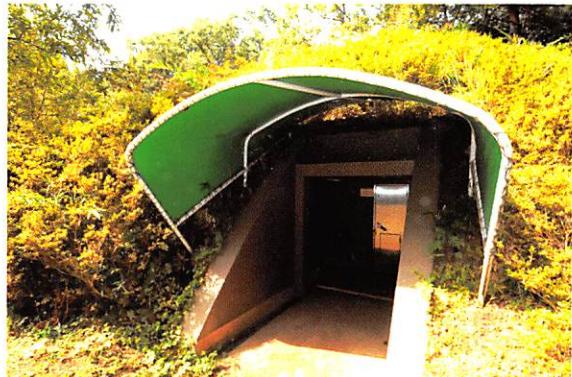
虎塚古墳 右壁



虎塚古墳 墳丘



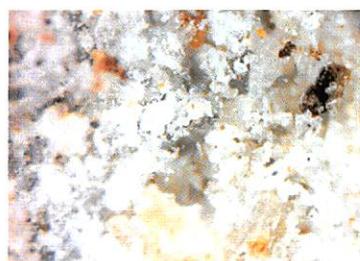
虎塚古墳 4号墳石室に使われた部田野石



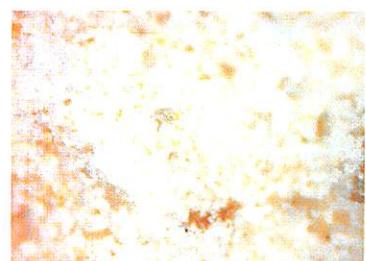
虎塚古墳 保存施設入口



部田野石



石 拡大画像



白土 拡大画像

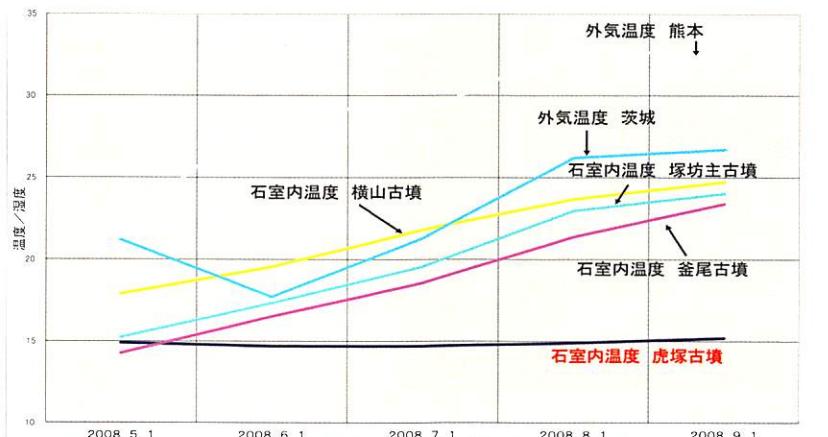
虎塚古墳石材である部田野（へたの）石

角礫を多く含む軟岩です。部田野石の歴史ははっきりしませんが、現在は使用されておらず、かつては様々な細工物が作られたようです。虎塚古墳群に近接する鹿嶋神社では部田野石製の石造物が残っており、昭和50年代までは使用が確認されています。菊池川流域では、装飾を施す阿蘇熔結凝灰岩（灰石（はいいし））は、賽（一尺角）50kg程度の程よい硬さの石材が選択されていますが、石室に用いた部田野石も同様の硬さと考えられます。灰石と異なるのはその角礫の入り方で、装飾を施す際に仕上げる均質な平滑面への加工が極めて困難であると推察され、白土を下地として塗った経緯が理解できます。

虎塚古墳保存施設

保存施設設置以来、室温16°C前後の一定の温湿度を保つ、極めて安定した環境として特筆されます。類似する菊池川流域の装飾古墳保存施設は、前室、見学室、玄室等と、二～三つの扉で区切られ密閉性の高い施設であっても、年間気温は10°C前後の推移を示しており（横山古墳、塙坊主古墳）、改めて虎塚古墳の保存環境の良さが理解できます。

装飾古墳保存施設内の温湿度変化



2) 吉田（よしだ）古墳

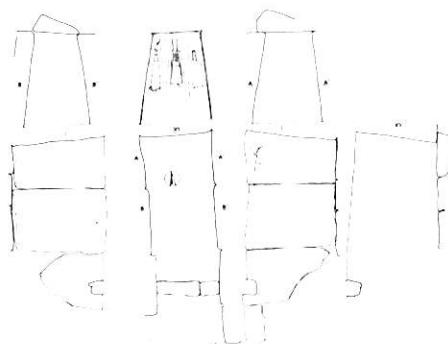
水戸市にある装飾古墳で水戸駅に程近い駅南口の丘陵にあります。奥壁にのみ線刻による鞍、太刀などが刻まれています。調査後埋め戻されたため、石室内は現在は見られませんが、水戸市教育委員会により日下整備とともに調査が進んでおり、墳丘が多角形を呈していることが確認されました。

写真、拓本からは福岡県珍敷塚古墳の鞍に似た形状の鞍が刻まれています。単室構造の石室で使用石材は厚みのある軟質の石材が用いられ、白河内2号墳に類似します。キャンバスをタガネ状の工具で平滑にする工具痕跡が顕著に残ります。奥壁正面の鞍のほぼ中央には、人吉市大村横穴の鞍の表現に共通する工具らしきくぼみが残ります。他にも何ヶ所かくぼみが見受けられますが、意図的な痕跡は、鞍とのバランスから見て中央の1ヶ所のみです。二つの鞍の文様は、珍敷塚古墳の下端のみをそろえる特徴と類似する一方で、向かって左側の大刀らしき装飾は、線刻の溝がより細く、下端の位置がずれています。同時における追刻の有無等検討もされています。

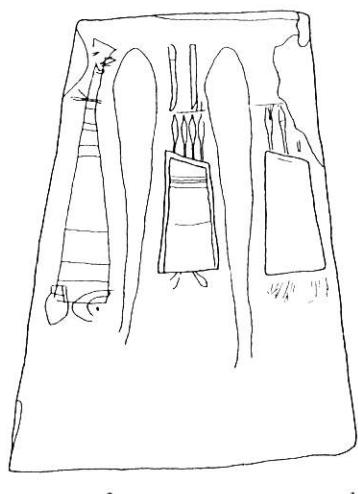
また、調査後に埋め戻した石室内がどのような保存状態にあるか、ほぼ同時期に埋め戻しされた熊本県小田良古墳、国越古墳の保存を考えるうえでも注目されます。



吉田古墳（レプリカ）
鞍に彫られたくぼみ



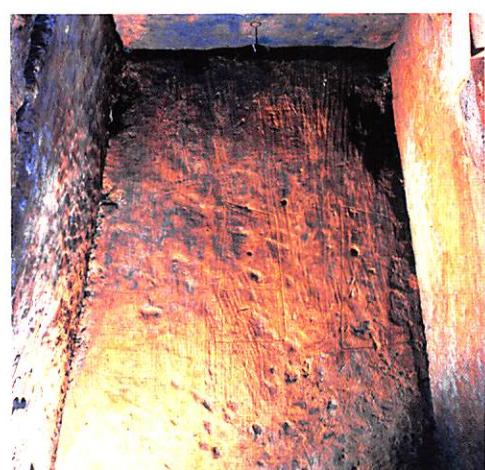
吉田古墳実測図
(引用文献13) 一部改変



吉田古墳実測図
(引用文献13) 一部改変



吉田古墳 外観



吉田古墳 玄室奥壁

3) 船玉古墳群1号墳：船玉（ふなだま）古墳

本古墳は、鬼怒川の東岸河岸段丘上に位置します。船玉古墳群の首長墓と見られ、一辺約35mの方墳です。本古墳は、下野国（栃木県）であり、古くから群馬、栃木方面との交流ルート上に立地します。

昭和2年鳥居龍蔵、昭和46年明治大学、昭和59～60年茨城大学によって調査が行われ、詳細な調査が行われています。

出土遺物は不明ながら、内部主体は複室構造の横穴式石室（玄室に箱式石棺状施設あり）で、使用石材は筑波山周辺で用いられる片岩系の石材であり、石室構造では太子1号墳（通称大師の唐櫃古墳）、折越十日塚古墳と共に通します。
かろうど

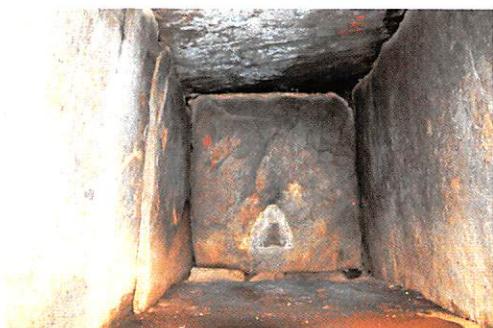
灰色の石材のうえに、線刻を施さず、直接白と赤の二色以上で鞍など具象文を巨石に描く古墳としては、菊池川流域では、御靈塚古墳、弁慶ガ穴古墳等に限られます。福岡では事例は多く、筑紫野市五郎山古墳などが類似します。文様の残りがわずかなため、詳細な言及はできませんが、鞍以外に様々な文様が近接して描かれていることから、横方向で同じ文様を規則正しく配列する装飾古墳、例えば重定古墳、王塚古墳より後出の感があります。本古墳より古いとされる太子古墳群1号墳の円文が既に横方向に施文を並列させていないことから、やはり福岡県内の6世紀末に位置づけられる装飾古墳の影響が考えられます。



船玉古墳



船玉古墳 玄門



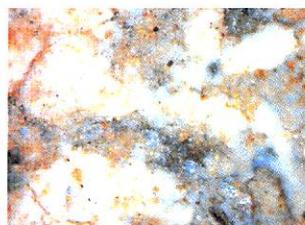
船玉古墳 玄室奥壁



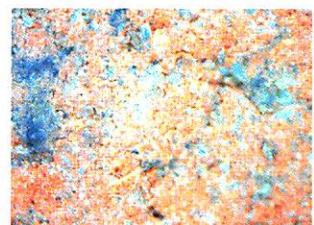
船玉古墳 鞍（部分）



船玉古墳 船？赤・白



船玉古墳 500倍（白）



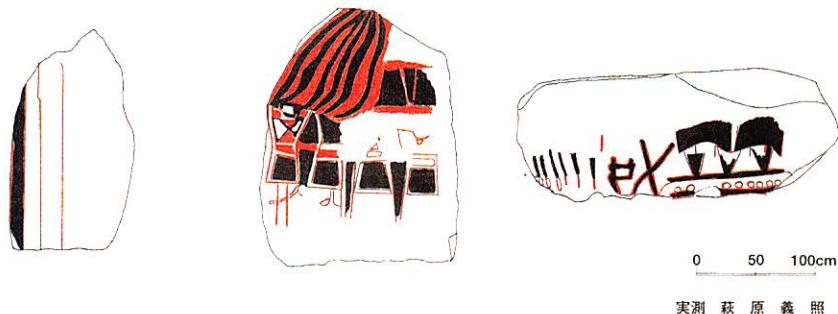
船玉古墳 500倍（赤）

4) 花園（はなぞの）古墳群3号墳

本古墳は、方墳とみられ、別に埴輪を伴う前方後円墳1基の盟主墳が存在しました。現地は、非装飾の2号墳のみ石室内を見学できます。装飾古墳である本古墳は、石室が破壊され消滅しています。石材の一部のみを旧岩瀬中央公民館で見ることができます。保管された三つの石材片からは装飾のどのような部分であったか判断が難しいところです。報告では白・赤・黒の三色による装飾が認められていますが、現存する三つの石材片では、このうち赤と黒の二色の彩色が確認できます。彩色を区画した線刻等は認められません。花崗岩を用いているところから、珍敷塚古墳と同様な石の地肌を利用した塗り残しの技法があった可能性もあります。

写真からは、明確な赤色の線による区画らしき彩色が見られます。どのような位置関係であったかは推定できません。彩色のみで描く特徴として、上下のズレが認められながらも横方向に連続した鞍の装飾があったことから、福岡県王塚古墳や、重定古墳などの装飾と類似しています。

黒・白・赤の三色が用いられていたならば、十王前11号横穴墓と同様、茨城県下で最も多色を用いた古墳であり、虎塚古墳に比肩する彩色壁画であったことでしょう。



花園3号墳 装飾文様実測図
(引用文献10) 一部改変



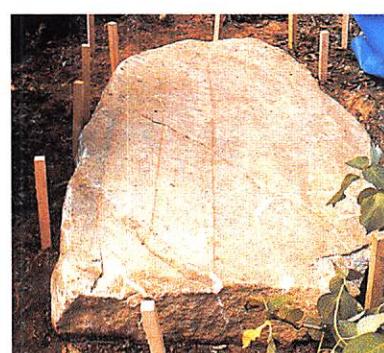
花園3号墳（消滅）



花園3号墳装飾（黒・赤）



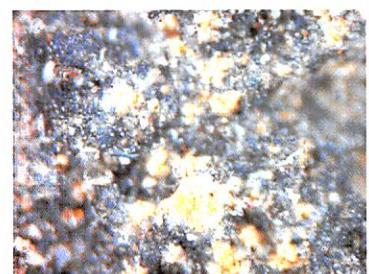
花園3号墳装飾（赤）



花園3号墳調査直後の装飾
(引用文献10) 一部改変



花園3号墳 500倍（赤）



花園3号墳 500倍（黒）

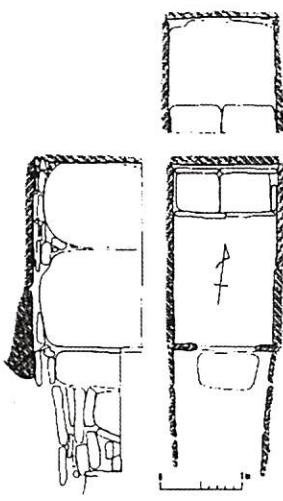
5) 太子古墳群1号墳：大師の唐櫃（たいしのかろうど）古墳

大規模な首長墓の造立が続く茨城郡にある装飾古墳。霞ヶ浦を望む台地上に位置し、付近には装飾古墳である折越十日塚古墳をはじめ、首長墓が集中します。現在、墳丘の殆どは失われ、石室は開口していますが、船玉古墳、虎塚古墳同様、太子古墳群の盟主墳です。

船玉古墳と同じ、片岩系の石材を用いた单室構造の横穴石室です。左右両側壁に円文のほか、矢印状文とされる多数の文様が描かれています。奥壁にも何らかの文様が描かれた可能性もありますが、現在は判別できません。

特徴は装飾文様を描いた際の顔料の滴りで、円文の径（15cm前後）の2倍以上垂れた痕跡が確認できます。顔料の滴りが確認できる例は、熊本県永安寺東古墳、宮城県山畠1号横穴墓等が挙げられます。

しかしながら、熊本、或いは古い時期の装飾文様に特徴的な横方向に配列する意識は認められません。文様を直接描き、円文等の配列にズレが認められる装飾の系譜は、福岡県日岡古墳の円文の描き方に求められるでしょう。



太子1号墳 石室実測図
(引用文献11) 一部改変



太子古墳群1号墳



石室入口



石室内



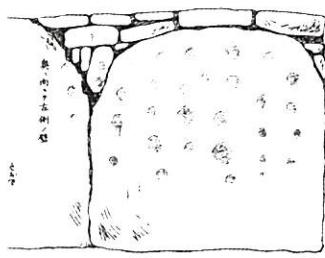
太子古墳右側壁の装飾



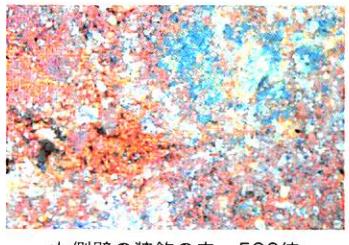
太子古墳左側壁の装飾



石材表面 500倍



太子1号墳 図文模写図
(引用文献11) 一部改変



左側壁の装飾の赤 500倍

6)・7)・8) 十王前（じゅうおうまえ）

横穴群

日立市は常陸風土記によると道奥（みちのく）に含まれる地域です。南にある久慈郡、久慈川の北岸までが関東平野になります。横穴墓は十王川の北側丘陵に南向きに開口しており、これまでに3基の装飾横穴墓が確認されています。

装飾横穴墓のプランはこの地方独特の羽子板の形状を呈します。このプランの床面は奥壁に向かって傾斜が高くなっています。計測値以上の大きさを感じます。特に11号は横穴群内では主墳とする位置付けが考えられます。

周辺の横穴群には、九州地方の横穴墓と類似するコの字屍床を持つものや、天井部が天窓状を呈するものも見られます。

この11号墳は、熊本の装飾技法に特に酷似し、細い線刻を横方向に区画し、内部に連続三角文を施します。14号一基、幡バック6号墓でも同様の文様が認められます。11号墓では、更に赤・黒による彩色を行っています。白色が塗られたとする報告も残っていますが、現在、その場所を確認することは出来ません。横方向の区画は、上下二段に認められ、虎塚古墳と文様帶の意識は酷似します。熊本県内では、山口横穴6号墓等、赤・白・青（灰色）の連続三角文、桜の上I-1横穴墓の赤と白の連続三角文などで類例が確認できます。何れの場合も、横穴群のなかでは盟主墳的な位置づけが可能です。



十王前横穴墓群 遠景



十王前横穴墓14号墓

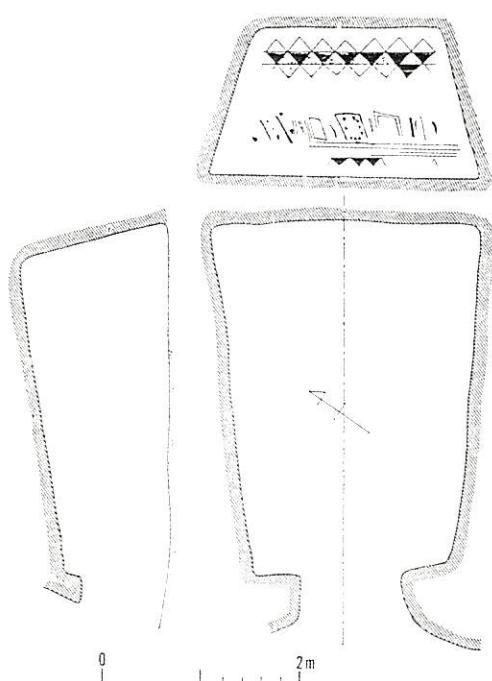


十王前横穴墓14号墓 連続三角文



十王前横穴墓1号墓（非装飾）

唯一、熊本と異なるのは黒色顔料の素材で、福岡の装飾古墳と同じ木炭を塗ります。熊本ではマンガンを含む黒色顔料が多用されますが、同種の黒色顔料は、花園3号墳で確認されています。山口16号横穴墓、桜の上I—1号横穴墓と同様の白色顔料の有無や、山口6号横穴墓と同じ青色（灰色）顔料が装飾古墳に使用されているかは今後の研究課題でしょう。



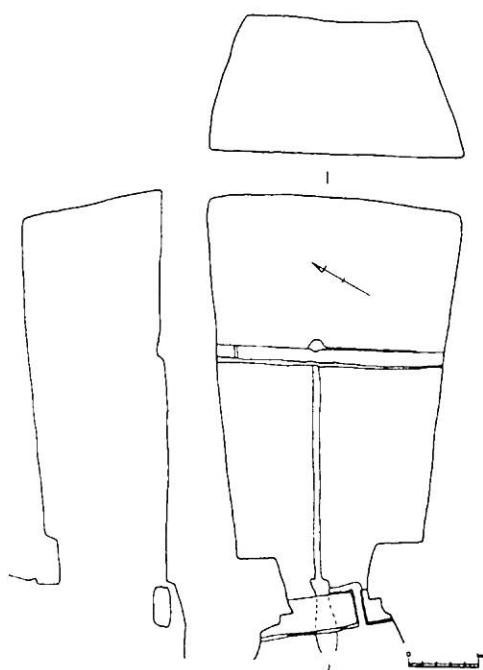
十王前横穴群11号横穴実測図（1/100）
(引用文献11)一部改変



十王前横穴墓11号墓



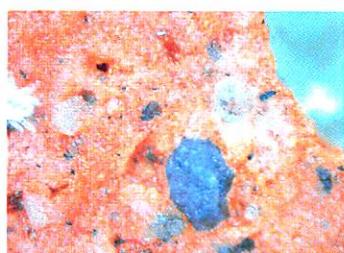
十王前横穴墓11号墓連続三角文



十王前横穴群14号横穴実測図（1/100）
(引用文献11)一部改変



黒色 500倍



赤色 500倍

9)・10) 幡横穴群：幡（はた）バッケ

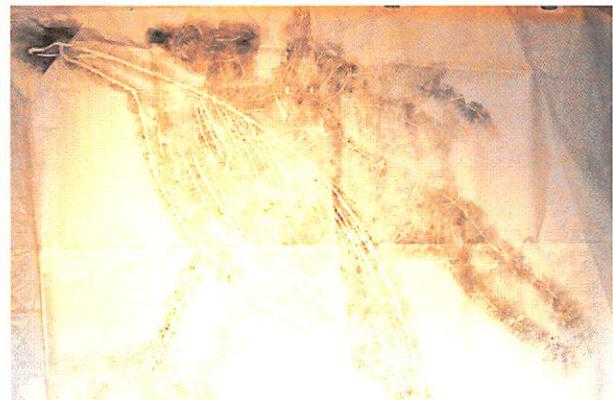
久慈川の北岸に位置する同横穴群は、6号・11号墓の2基で、奥壁に太い線刻で鳥などを描いた装飾横穴墓として知られていました。幅1cmを超える太い線刻による装飾は、熊本県内では、例えば5世紀末の千金甲1号墳などで見られます。

但し、これらは、幾何学文様・具象文の併用で確認できるもので、鳥のような自由画風の線刻では類例はありません。既に指摘されているように、初葬時の装飾とは認めがたいですが、どの段階での追刻かは、なお検討を要します。また、奥壁は比較的平滑に整形されており、装飾文様を描く平面と似た加工仕上げです。側壁ではこの傾向は認められません。

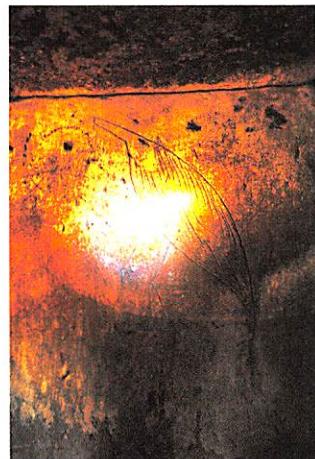
近年、6号墓では、大形の鳥の文様に切られるように、細い線刻による連続三角文が奥壁で確認されており、十王前横穴墓と同様な装飾古墳と捉えられます。

幡バッケ横穴群のある久慈郡は、白土、青色とおぼしき顔料の採取地の記述が、常陸国風土記で見られます。これらが実際どのような性質のものかは不明ながら、豊後国風土記の速見郡の赤湯（現別府市血の池地獄か）の赤色を柱に塗るとされる記述と併せて、顔料の採取地として注目されます。赤湯のある大分県別府市では、赤色で彩色した鬼の岩屋1号、同2号古墳が存在します。久慈郡内では、白・青色を用いた装飾古墳、顔料の産地は見つかっていませんが、那珂郡に含まれる虎塚古墳群に近接するひたちなか市馬渡埴輪製作跡では、関東ローム層の水性堆積による白色粘土が採取できます。また、同埴輪製作跡は、装飾古墳の導入前に生産が中止されています。ここからは、九州で青色顔料とされる灰色（紺色）の顔料が塗られた埴輪片が出土しています。

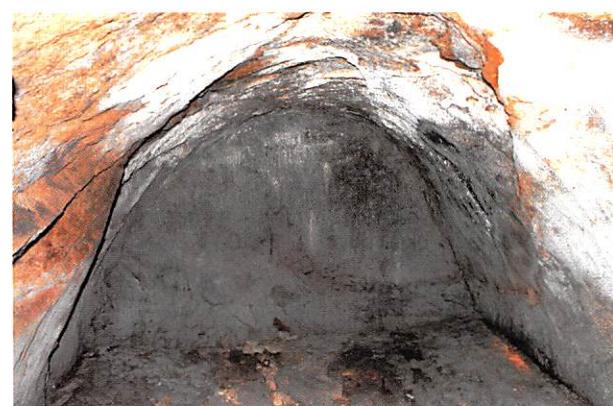
なお、この青色顔料を用いた装飾古墳は茨城県内では見つかっていません。



幡横穴群6号墓 拓本



幡横穴群6号墓 奥壁線刻



幡横穴群

幡横穴群11号墓 左側壁図文
(引用文献11) 一部改変

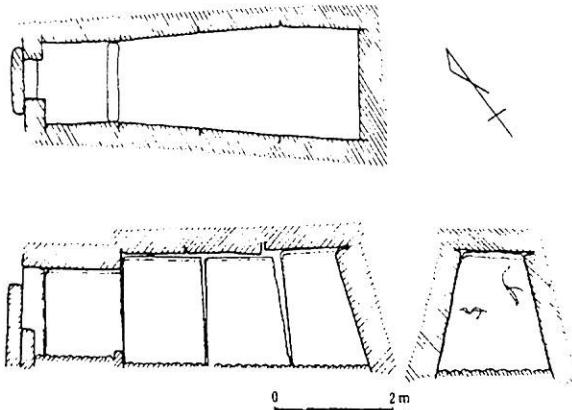
11) 白河内（しらかわち）古墳群2号墳

厚みのある軟岩に、タガネ上の工具で平滑に仕上げた横穴石室平面に、鳥とおぼしき装飾文様が描かれています。鳥の線刻は、幡バッケ横穴墓と同様な太い線で描かれており、追刻とする指摘もあります。

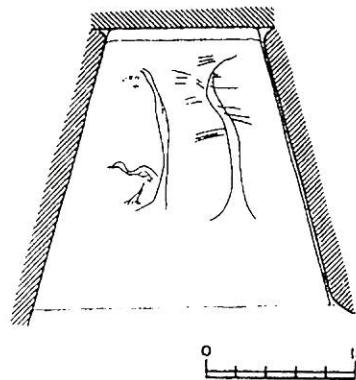
奥壁での文様構成は、吉田古墳と類似しますが、描かれた文様のモチーフの類例は、九州では見られません。



白河内古墳群2号墓



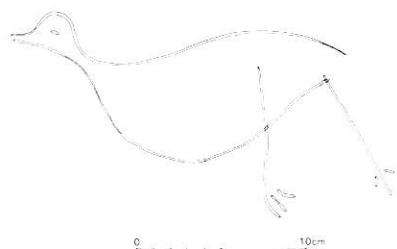
白河内古墳群2号墳 石室実測図 (1/100)
(引用文献11) 一部改変



白河内古墳群2号墳 奥壁図文実測図 (1/4)
(引用文献11) 一部改変

12) 須和間（すわま）古墳群12号墳

軟岩で、傷が付き易い石材を組み合わせた横穴式石室であつたとされ、細かな植物の繁茂による痕跡が残ります。天井部は調査時既に無く、石室内にタッチの異なる二種類の装飾が確認されています。一方は人物像ながら、石室の剥離痕を切っていることから明らかな後世の追刻とされています。報告書に記載された写真を見る限り、残る水鳥らしき線刻も、初葬時である保障はありませんが、拓本ではタガネ上の工具などの加工痕も残らない精緻な平面に仕上げており、装飾文様を施す壁面としては申し分ありません。



須和間12号墳 水鳥実測図



須和間古墳群2号墓 線刻による水鳥

4. 熊本県と茨城県、二つの地域の共通性・非共通性

熊本県下の装飾古墳は、4世紀頃に線刻画で発見されています。しかし、系譜として変遷が辿れるものは、7世紀前半までの間です。装飾古墳は当初は小規模な円墳や、石棺に採用されます。現時点では、和水町清原古墳群内の塚坊主古墳が6世紀前半～中頃、菊池川で初めて造られた装飾古墳と理解されています。この段階ではじめて前方後円墳に装飾古墳が採用されます。

一方、茨城県内の装飾古墳は、6世紀末～7世紀前半、虎塚古墳をはじめ、船玉古墳、折越十日塚古墳など、前方後円墳、方墳といった盟主墳、あるいはそれに次ぐ古墳に採用される場合がほとんどです。また、十王前、幡バッケなど装飾横穴墓でも、玉名市石貫ナギノ横穴墓群、山鹿市桜の上I-1号横穴墓、或いは植木町山口横穴墓群と同様に、ほぼ中央に位置する地点に造られること、規模が非装飾の横穴墓に比べて大きいことなど、盟主墳の様相を呈しています。

塚坊主古墳は、細い線刻で菱形文、円文・連続三角文を一部でのみ区画し、内部を黒・赤・白で塗ります。顔料による絵画的表現が認められるのは、6世紀中頃のチブサン古墳（黒・赤・白）の人物、菱形文の上に重ね塗りされた円文など限定的です。チブサン古墳は彩色面には線刻を全く用いませんが、石屋形に無彩色で、横方向に菱形文の連続した線刻があり、塚坊主古墳と類似します。この線刻併用で円文に彩色を施す点、船など限定的な絵画表現は、7世紀初頭の永安寺東古墳にまで踏襲されています。

茨城県内では、線刻の一部併用で彩色を施すという装飾技法、線刻のみならず横方向の連続した施文は、虎塚古墳、十王前横穴群、幡バッケ6号横穴墓、吉田古墳奥壁の轍の装飾が挙げられます。

顔料のみで絵画的表現を施した装飾古墳は、福岡県日岡古墳（緑・赤・白・青）が最初であり、菊池川での多色による絵画的表現の導入は、御靈塚古墳、弁慶ガ穴古墳など6世紀後半とやや遅れます。ただし、この段階でも菊池川流域では、緑色や黄色による絵画表現はなく、赤・黒・白色のほかは、青色（灰色）のみ用いられ（弁慶ガ穴古墳）、十王前11号横穴墓（赤・黒・白？）、花園3号墳（赤・黒・白？）と酷似します。異なるのは、玉名市大坊古墳で見られるような青色と黒色の使い分けです。



塚坊主古墳



桜ノ上I-1号横穴墓



チブサン古墳



永安寺東古墳

対象	所在地	色	解釈	時期	L*	a*	b*
横山古墳	熊本県植木町	赤	ベンガラ	6世紀前半	41.9	14.4	18.1
		白	粘土		67.3	5.6	17.5
		灰色	粘土?		33.4	2.6	6.6
		石材	安山岩		43.2	7.6	18.3
大坊古墳	熊本県玉名市	灰色	粘土?	6世紀前半	30.3	0.4	3.3
		黒色?	マンガン土?		7.9	0.9	1.6
		石材	凝灰岩		22.9	1.3	3.8
椿山古墳家形埴輪	熊本県和水町	灰色	粘土?	5世紀後半	37.8	6.7	9.1
		地	埴輪		47.1	16.7	19.0
船玉古墳	茨城県筑西市	石材	片岩	7世紀前半	29.7	3.6	6.9
		白	粘土		45.4	3.4	13.0
		赤	ベンガラ		34.9	10.6	11.7
太子1号墳	茨城県かすみがうら市	石材	片岩	6世紀末~7世紀初頭	37.9	1.4	8.7
		赤	ベンガラ		35.9	13.2	15.0
虎塚古墳(レプリカ)	茨城県ひたちなか市	白	レプリカ	7世紀初頭	67.0	3.4	14.5
		赤	レプリカ		46.9	31.4	23.2
虎塚古墳4号部田野石	茨城県ひたちなか市	石材		7世紀前半	28.0	1.9	4.6
舟塚1号墳武人埴輪	茨城県東海村	地	埴輪	6世紀後半	42.4	16.7	18.4
		赤	ベンガラ		39.4	21.8	17.5
		灰	粘土?		42.4	9.7	11.8
十王前11号横穴墓	茨城県日立市	黒石	凝灰岩	7世紀初頭	46.4	4.8	17.0
		赤	ベンガラ		35.9	19.8	13.6
		黒	木炭		25.9	0.6	1.9
花園3号墳石材	茨城県桜川市	石材	花崗岩	6世紀末~7世紀初頭	51.4	4.2	14.6
		黒	マンガン土?		38.4	2.4	7.7
		赤	ベンガラ		46.5	6.0	13.5
花園3号墳石材	茨城県桜川市	石材		6世紀末~7世紀初頭	54.9	3.8	15.3
		赤	ベンガラ		43.0	14.5	16.4
古墳館顔料レプリカ	熊本県山鹿市	黒I	マンガン土		23.3	-0.1	-0.4
		黒II	木炭		19.2	1.4	1.5
		灰	粘土		48.2	2.9	9.7
		白	粘土		84.0	0.1	8.0
		赤	ベンガラ		29.3	22.9	15.1

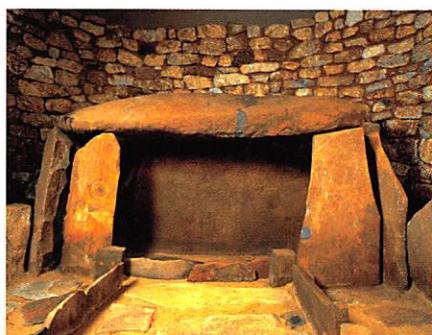
装飾古墳、形象埴輪に用いられる顔料



舟塚1号墳出土武人埴輪（赤・灰色）※参考資料



和水町椿山古墳家形埴輪（灰色）



横山古墳



大坊古墳

装飾古墳の「青色（灰色顔料）」は、茨城県内では舟塚1号墳武人埴輪など6世紀後半の人物埴輪に塗られた「紺色」と同種同色のものです。茨城県では埴輪製作の終焉後、装飾古墳が造られます。これまでのところ、埴輪に用いた紺色の顔料は、茨城県内はもとより東日本の装飾古墳には採用されておらず、菊池川流域と様相は異なります。

一方、菊池川流域はもとより九州では紺色を塗った埴輪の出土例はこれまで皆無でしたが、塚坊主古墳のある和水町では、椿山古墳家形埴輪で一例ながら発見されています。

しかし、茨城県下の人物埴輪など、紺色を塗った形象埴輪の塗布したところを見ていくと、髪の毛、髭、甲冑など、黒い色を意識した部分で使用されていることが解ります。

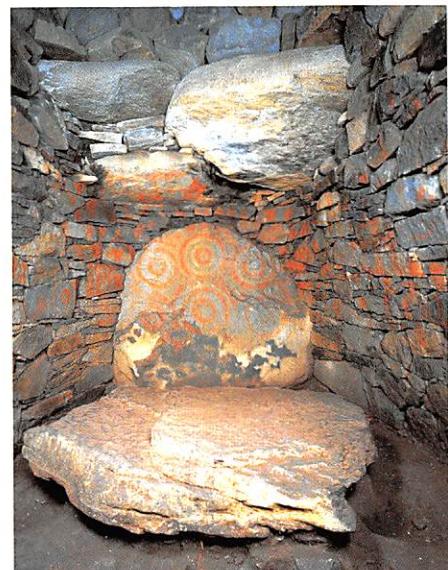
つまり色彩感覚は相対的なもので、同時代であっても地域、場所によって、同じ色が異なる色として使われることが考えられます。

これまで顔料分析の結果からは、熊本の装飾古墳では黒色顔料はマンガンを含んだ粘土の報告が多く見られることが指摘されています。また、福岡県では木炭を使った顔料が黒色として使われます。福岡県内でも、阿蘇熔結凝灰岩を用いた石屋形を採用する玉塚古墳では、黒色はマンガンを含む粘土が使われています。

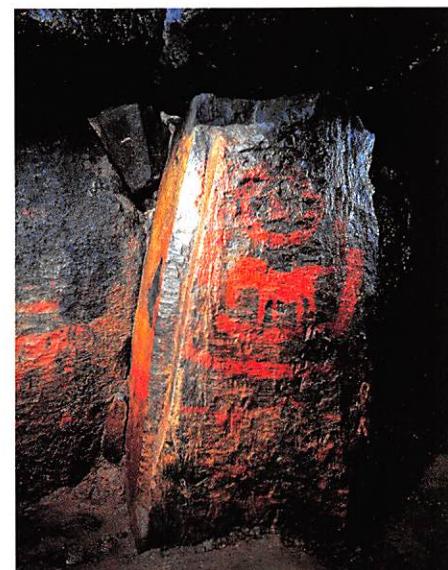
茨城県内で黒色を用いた装飾古墳は、花園3号墳、十王前11号横穴墓が挙げられますが、このうち花園3号墳はマンガンを含んだ粘土、十王前11号横穴墓は木炭と一様ではありません。十王前11号横穴墓は、装飾技法としては線刻・彩色の併用による横方向の文様帯を意識したもので、菊池川流域との関連性が高い装飾古墳ですが、顔料ではそこまでの共通性はありません。埴輪における「紺色」を用いた黒色表現と同様、黒く見えることが第一の目的であるため、単に手に入れやすい顔料を用いたと捉えられます。

但し茨城県内で、6世紀後半まで埴輪に用いられた黒色の代用である「紺色」、九州の装飾古墳で言う「青色（灰色）」が、6世紀末～7世紀前半で黒色を表現する装飾古墳の顔料に採用されていない点については注視しておく必要があります。「青色（灰色）」を、黒色の代用としては認めがたい色彩感覚を持った集団による彩色の可能性が考えられます。茨城県内に黒色と区別して青色を用いた装飾古墳の例は無いのか、今後の課題です。

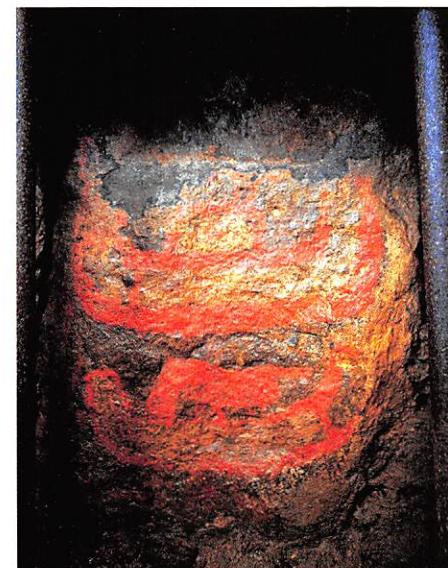
日岡古墳のように、絵画的表現のみで装飾が描かれ始めると、最初は装飾文様の下端のみ揃える場合もありますが（福岡県珍敷塚古墳）、横方向の装飾文様が徐々に連続しない変遷を辿ります。例えば福岡県重定古墳は、規則正しく並べた鞍にズレが生じています。弁慶ガ穴古墳に至っては、副室に上下二段の船に棺、馬の絵が描かれながらも、第二羨門では、一艘の船に馬と太陽が描かれ、一段の文様構成



日岡古墳



弁慶ガ穴古墳



弁慶ガ穴古墳

となり文様帯が繋がりません。五郎山古墳、竹原古墳では人物や船、馬の大小に差があり、一見遠近法が採用されているかのような絵画表現で、もはや文様帯を構成する意識はありません。

このような変遷過程に当てはまる茨城県内の装飾古墳としては、太子古墳、花園3号墳、船玉古墳が挙げられます。九州では、福岡、熊本、大分、佐賀県の一部で認められますが、更に緑・黄色を用いないエリアという条件が加わると、やはり熊本県菊池川流域に限定され、花園3号墳、船玉古墳と類似します。

前段階の線刻により装飾を施して内部を赤一色で塗る技法は、菊池川流域ではその後も残り、永安寺東古墳（7世紀初）、同西古墳（7世紀前半）で見られ、虎塚古墳と同種の装飾技法が確認されます。横穴墓では、内部のみならず、飾り縁や壁面に直接彩色や浮彫（玉名市石貫ナギノ横穴墓群、鍋田横穴墓群）が盛んに作られていますが、内部にのみ連続三角文等を施す横穴墓も存在し（桜の上1-1横穴墓など）、横穴石室の装飾と共通します。

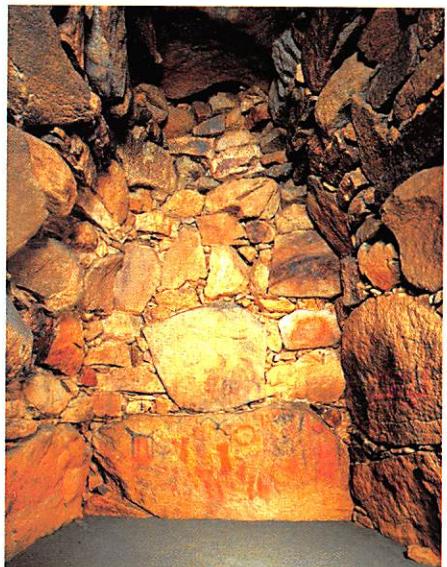
自由画風の線刻壁画は、追刻の問題を常にはらみますが、熊本県では宇土半島基部に見られ、長崎県や、佐賀県の西側にも見られます。何れも海に面した装飾古墳が多く、描かれるモチーフには、船・鯨・イルカといった海に関わる文様が主題となり、古墳の立地と整合します。

茨城県下の場合、鳥のモチーフが多いことが指摘できますが、それが何を意味するかは今後の課題です。確実な古墳時代の線刻絵画と捉えられる吉田古墳の奥壁の鞍などの装飾は、細い線刻で書き下端を揃えて横方向の文様帯を意識しているなど、菊池市袈裟尾高塚古墳（6世紀後半）の石屋形内の線刻による装飾と絵画技法で共通します。太く力強い線刻で彫られた幡バッケ横穴墓などの大きな鳥の装飾は、九州ではありません。

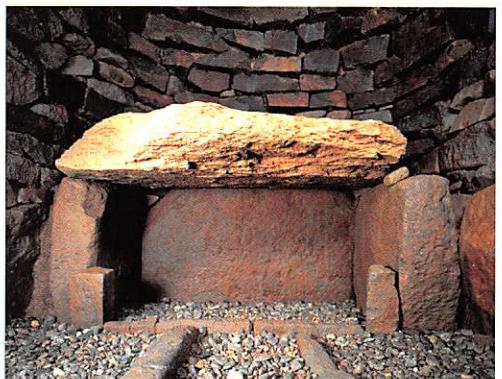
吉田古墳の鞍は、装飾技法こそ熊本と類似しますが、鞍の形状そのものは寧ろ珍敷塚古墳と酷似しています。但し、中央のもっとも均整の取れた鞍の中央にある凹みは、熊本県大村11号横穴墓など、熊本で見られる鞍の中央に穿たれた凹みと同じ意図的な加工であり、両者の共通性が改めて指摘できます。

熊本の横穴墓では、浮彫による文様表現が多用されますが（大村横穴、鍋田横穴、長岩横穴など）、弁慶ガ穴古墳でも羨道左側で人物を表すのに用いられ、横穴石室と横穴墓の装飾技法は地域的に共通すると言えます。

浮彫表現による装飾文様は、茨城県内では皆無です。もっとも浮彫は、阿蘇熔結凝灰岩や砂岩で見られるもので、花崗岩、安山岩、片岩などでは見られません。単に使用石材に左右される装飾技法と捉えることも可能ですが、虎塚古墳石室に使用された部田野石、吉田古墳使用石材など、軟岩の加工技術について調査を進める必要もあるでしょう。



五郎山古墳



袈裟尾高塚古墳



珍敷塚古墳

5. 文献から見た装飾古墳に関する土地の記述

古事記、常陸国風土記には、九州との関連を伺わせる常道の仲国造、建借間命などの記述が見られます。建借間命は那珂国造の祖とされていますが、那賀の郡（那珂国）とされる一帯は、特に装飾古墳が集中しています。

また、久慈の郡には、青土、白土という顔料に関する記述も記されています。青土がどのような顔料であったかは未だ不明ですが、装飾古墳である大分県別府市鬼の巖古墳が存在する豊後国速見郡に赤色の記述があるように、装飾古墳に関する地域の記述として注目されます。

古事記 神武天皇 当芸志美美命の反逆

（前略）こうしてカムヤキミミノ命は、弟のタケヌナカハミミノ命に皇位を譲って申すには、「私は敵を殺すことができなかった。あなたは完全に敵を殺すことがおできになった。だから、私は兄であるけれども、上に立つべきではない。そういうわけで、あなたが天皇となって、天下をお治めなさい。私はあなたを助けて、祭事をつかさどる者となってお仕え申しましょう」と申しました。さて、そのヒコヤキノ命は、茨田連・手島連の祖先である。カムヤキミミノ命は、意富臣・小子部連・坂合部連・火君・大分君・阿蘇君・筑紫の三家連・雀部臣・雀部造・小長谷造・都祁直・伊余国造・科野国造・道奥の石城国造・常道の仲国造・長狭国造・伊勢の船木直・尾張の丹波臣・島田臣等の祖先である。カムヌナカハミミノ命は、天下をお治めになった。

（出典 次田真幸「古事記（中）一全三卷一」講談社）

常陸国風土記

新治の郡 東は那賀の郡との堺の大きな山である。南は白壁の郡である。西は毛野の河（鬼怒川）である。北は下野・常陸の二つの国の国境で、すなわち波太の岡である。

那賀の郡 東は大海（太平洋）、南は香島・茨城の郡、西は新治の郡と下野の国との堺にある大きな山、北は久慈の郡である。

久慈の郡 東は大海（太平洋）、南と西とは那珂の郡、北は多珂の郡と陸奥の国との堺の岳である。古老がいうことには、「郡役所から南の近いところに、小さな丘がある。その形が鯨鯢に似ているので、倭武天皇が久慈と名づけられた」。（以下は省略）

郡役所から西北二十里のところに河内の里がある。もとは古々の邑と名づけた。《土地の人の説くところでは、猿の声はココというのだそうである。東の山に石の鏡がある。》昔魑魅がいたが、群れ集まってきて鏡をいじくりまわして見て、たちまちひとりでにいなくなった。《土地の人は『疾鬼も鏡に向かえば自ら滅ぶ』という。》そこにあるところの土の色は青紺（藍）色のごとくで、画に使うと美しい。《土地の人はアヲニ（青土）といい、あるいはカキツニ（描きつ土）ともいう。》時には朝廷の命令で採取して進納する。世にいう久慈川の濫觴は猿声から出ている。（以下は省略）

郡役所の東七里のところに太田の郷があり、長幡部の社がある。（中略）ここ（太田里）から北のかたに薩都の里がある。北の山にあるところの白土は画に塗ることができる。

多珂の郡 東と南とはともに大海（太平洋）、西と北とは陸奥と常陸の二つの国の堺の高い山である。

古老がいうことには、「斯我高穴穗宮大八洲照臨天皇（成務天皇）のみ世に、建御狹日命をもって多珂の国造に任じた。この人が初めてやって来て地形を巡歴踏査したとき、峰はけわしく山がたかいことだと思って、それで多珂の国と名づけた」。《建御狹日命はこれすなわち出雲臣と同属である。今多珂・石城といっているのがこれである。風俗の説に「薦枕多珂の国」といっている。》

建御狹日命は、派遣されたその時に久慈〔郡〕との堺の助川をもって道前とし《郡役所を西北に去ること 六十里、今なお道前の里と称している》、陸奥の国の石城の郡の苦麻の村を道後とした。

（出典 沖森卓也ほか「常陸国風土記」山川出版社）

行方の郡 難波の長柄の豊前の大宮に天の下をお治めになった天皇（孝徳天皇）のみ世の癸丑の年（六五三年）に、茨城の国造小乙下壬生連麿・那珂の国造大建壬生直夫子らが、惚領高向の大夫・中臣幡織田の大夫らに請願して、茨城の地の八つの里〔と那珂の地の七つの里と〕を割き、七百余戸を合わせて別に郡を置いた。（中略）

古老がいうことには、「斯貴瑞垣宮に大八洲をお治めになった天皇（崇神天皇）のみ世に、東方の辺境の荒賊を平定するために建借間命《すなわちこれは那珂の国造の初祖である》を遣わした。〔建借間命は〕軍士を引率して行く手のわる賢い賊どもを攻略しながら、安婆の島に露営した。はるかに海（霞ヶ浦）の東の浦を眺めたとき、烟が見えたので、〔軍士たちは顔を見合させて〕お互に行く手に人がいるのかしらと疑った。建借間命は天を仰いで神に祈誓して、『もし荒賊どもの烟ならば、むこうに去って海上にたなびけ』といった。その時烟は海をさしてさっと流れた。そこで凶賊がいることがひとりでにわかった。ただちに従う軍衆に命じて早目に充分寝食をとらせ戦闘準備を充分にととのえて海を渡った。ここに国栖（先住民）で名を夜尺斯・夜筑斯という二人のものがいて、みずから指導者となって穴を掘り、堡を造り、いつもそこに住んでいた。官軍の動きを見て潜伏して守り、抵抗するので、建借間命は兵隊を放って追い駆けさせるが、賊どもはみな逃げ還って、堡を閉じて固くふせいだ。そこで突如として建借間命は大いに臨機応変の計略をめぐらし、決死のつわものをよりすぐり、山の曲り角の見えないところに伏せ隠し、賊を討滅すべき武器を作り備えた。そして、海の波打ちぎわを美々しくかざり、舟をつらね、筏を組んだ。蓋は雲のごとくへんぱんと飛び、旗は虹をかけたよう。天の鳥琴・天の鳥笛の音は、波の寄せるにしたがい、潮を追うて高鳴る。杵島ぶりの歌曲をうたって七日七夜遊樂歌舞した。その時賊党はさかんな音楽を耳にして房全部の男も女もみなことごとく出て来、浜をゆるがさんばかりによろこびさんざめいた。建借間命は騎兵に命令して堡を閉鎖させ、背後から襲撃してことごとく全種属（族）のものたちを捕虜にし、またたく間に焚き滅ぼした。この時、『痛く殺る』と言った所を、今は伊多久の郷と謂い、『臨に斬る』と言った所を、今は布都奈の村と謂い、『安く殺る』と言った所を、今は安伐の里と謂い、『吉く殺く』と言った所を、今は吉前の邑と謂っている」。

（出典 吉野裕「平凡社ライブラリー328 風土記」平凡社）

郡ごとの装飾古墳一覧

多珂郡	十王前横穴群（6）・（7）・（8）
久慈郡	幡横穴群（9）・（10） 猫淵横穴群（16） 須和間古墳群（12）
那賀郡	虎塚古墳群（1） 吉田古墳（2） 白河内古墳群（11） 金上古墳（15） 下ノ諏訪横穴群（18） 権現山横穴群（13）・（14）
新治郡	花園古墳群（4） 船玉古墳群（3）
茨城郡	太子古墳群（5） 折越十日塚古墳（17）

出品・資料提供一覧

虎塚古墳出土鉄器（鎌4点・刀子1点・鉗子1点・鉄鉢1点）	ひたちなか市教育委員会
虎塚古墳石室内写真9点	ひたちなか市教育委員会
虎塚古墳石室使用石材（部田野石新材）	ひたちなか市教育委員会
虎塚古墳ペーパークラフト	ひたちなか市教育委員会
虎塚古墳体験学習用石材2点	ひたちなか市教育委員会
幡6号横穴群水鳥拓本1点	ひたちなか市教育委員会
馬渡埴輪製作跡出土灰色顔料付き埴輪片3点	ひたちなか市教育委員会
馬渡埴輪製作遺跡周辺採取の白土	ひたちなか市教育委員会
舟塚1号墳出土武人埴輪（茨城県指定文化財）・同写真	東海村教育委員会
須和間12号墳水鳥拓本1点・同写真	東海村教育委員会
吉田古墳奥壁装飾拓本1点	瓦吹 堅
吉田古墳石室石材片1点	水戸市教育委員会
吉田古墳奥壁写真	水戸市教育委員会
花園古墳群3号墳石室石材片1点	桜川市教育委員会
椿山古墳灰色顔料埴輪片	和水町教育委員会
装飾古墳絵画資料11点	池田勝則

引用文献

- (文献1) 佐藤正好ほか「幡山遺跡発掘調査報告」常陸太田市教育委員会 1978
- (文献2) 次田真幸「古事記（中）一全三巻一」講談社 1980
- (文献3) 「史跡虎塚古墳保存整備報告書」茨城県勝田市教育委員会 1981
- (文献4) 志田諒一「教育社歴史新書〈日本史〉21 風土記の世界」教育社 1986新装版
- (文献5) 関城町史編さん委員会「関城町史 別冊史料編 関城町の遺跡」関城町 1988
- (文献6) 「須和間12号墳の調査」東海村教育委員会 1989
- (文献7) 吉野裕「平凡社ライブラリー328 風土記」平凡社 2000
- (文献8) 片平雅俊ほか「風返稻荷山古墳」霞ヶ浦町教育委員会 2000
- (文献9) 「関城町の文化財」関城町教育委員会 2001
- (文献10) 「岩瀬町の文化財」岩瀬町教育委員会 2002
- (文献11) 「第51回埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～ 発表用要旨集・資料集」埋蔵文化財研究会 第51回研究集会実行委員会 2002
- (文献12) 鴨志田篤二「日本の遺跡3 虎塚古墳 関東の彩色壁画古墳」同成社 2005
- (文献13) 関口慶久ほか「吉田古墳I—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書—」「水戸市埋蔵文化財調査報告 第6集」水戸市教育委員会 2006
- (文献14) 池田朋生 朽津信明「日本文化財科学会第26回大会 古墳時代における灰色、黒色顔料の利用」2009
- (文献15) 川崎純徳ほか「公開講座「ひたちなか市の考古学」第1回 増輪の考古学」ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2009
- (文献16) 稲田健一「茨城県の装飾古墳—虎塚古墳を中心として—」ひたちなか市埋蔵文化財調査センター公開講座「ひたちなか市の考古学」第2回 装飾古墳の世界 2009
- (文献17) 生田目和利「九州の装飾古墳・装飾横穴墓との関連性について」ひたちなか市埋蔵文化財調査センター公開講座「ひたちなか市の考古学」第2回 装飾古墳の世界 2009

21 教委 熊古
⑥001

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第21集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：茨城県の装飾古墳

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日